



赤い星

〈兵庫県〉

洲本 すもと 美智代 みちよ 39歳

秋も深まり冬の気配が近づく夜のことだった。

「お母さん、僕は星空を見たことがないねん。夜にお出掛けしたことないやろう？ 本物の星空を見てみたいなあ」。そう話す息子には、もう時間がない。

難病で肺を患い、入退院を繰り返して9歳になった。夏の終わりまで、酸素ボンベを乗せた車いすで病院の周りを散歩することができた。しかし、今では外出もままならず、病室の天井と壁を見つめる日々が続いている。

外の世界といえば、わずかに見える窓からの景色とテレビ、そして大好きな凶鑑を眺めることだった。「凶鑑があれば何でも分かるから」と、いつも枕のそばに置いていた。

少しの時間だけでも星空を見せてやりたいと医師に相談してみたが、容体は安定せず、外出の許可は下りなかった。私は「願いをかなえてやることのできなくて悔しい」と担当の看護師にぽつりと漏らした。

すると次の日、看護師が家庭用の小さなプラネタリウムを持ってきてくれた。手のひらサイズの宇宙の登場に息子はとても喜んだ。夜を待ち、個室の電気を消してスイッチを入れると、天井と壁一面に冬の星空が広がった。凶鑑で覚えたオリオン座を見つけると、「ベテルギウスは一等星で赤い星やで。僕は赤が好きやから、ベテルギウスは僕の星やな。もう寂しくないわ」とうれしそうに笑った。

病室で星空を見た数日後、息子は眠

るように逝った。

看護師の仕事といえば点滴の交換や患者の世話をすることだと思っていた。しかし、体に触れるだけでなく、患者と家族の気持ちに寄り添いそつと支えることも看護ではないだろうか。

プラネタリウムのおかげで息子も私も救われた。最期の自由を与えてくれた看護師の優しさに心から感謝している。